

文庫あれこれ◆私たち世代(アラシックス?)は、むぎわらぼうし、とくると、すぐ森村誠一の『人間の証明』に使われた西條八十の「帽子」という詩を思い出しますね。あれです。“かあさん、僕のあの帽子、どうしたんでせうね? ええ、夏、碓氷から霧積へゆくみちで、谷底へ落としたあの麦わら帽子ですよ。……”今回は、<お便り>冒頭からちょっと回顧調になってしまいました。◆伊豆高原の駅で青空から突然暗雲立ち込めたと思ったらパラパラと来て、にわか雨に追われて大室にのぼって来たら、ここはすでに雨の降ったあと、道路に一面散水したようなあとが。車をおりたら、地面からあがる蒸気が強烈な暑さを。◆九州をはじめ、西の地域は豪雨の被害に見舞われてお気の毒なことです。でも今年は台風の話はまだないですね。◆週末はどうかしら? 毎年、開館記念日、海の日のおはなし会は台風時期で天候が危ぶまれます。◆今年10周年の「海の日のおはなし会」は、東京からのいつもの語り手メンバーや音楽グループに加えて、文庫の子どもたちが参加してくれます。詩の朗読やおはなしで。◆戸外で聴くおはなしの素晴らしさを知って、伊豆高原駅の活性化に繋がればと思っただけなのですが(これはあまり功を奏していない?)、よく10年続いたな、と思います。支えてくださる伊豆急ハウジングのみなさん、定年で退かれたけれど全部手配をしてくださったやまもプラザのSさん、忙しい中、かけつけてくれる語り手の友人たち、そして文庫の仲間スタッフ、欠かさず聴きにきてくださる地元の方たち。ありがとうございます。今年は、伊豆急本社の方の嬉しいサポートもありました。伊豆高原の楽しい風物詩のひとつになれば、と思います。◆唐突ですが、京都に一泊してきました。92歳の老母を長生きさせる会?の我夫が企画した旅行が1999年夏に始めて50回になりました。いつもつましい主人がこの旅行は頑張って名だたる旅館を予約してくれるのですが、老母の目的はもっぱら、麻雀をすること。美食家だった母は今では栄養補助剤の飲み物だけしか受け付けませんが、お酒だけはちょっと嗜みます。そんなですから、今回泊まった俵屋さんでも観光は一切なし、着いた途端から寝るまで、そして翌朝チェックアウトまでひたすら麻雀。目が輝いて来るのです。この3ヶ月に1度の旅で残りの日々を繋いでいる感じです。おかげで、ひとり置いて私も文庫に来られるというわけです。◆今日は朝から晴れ、暑くなりそうです(17日金曜日)。文庫4周年に向けて今日は文庫の大掃除。次の年へ出発です。みなさんのおいでを本を揃えて、お待ちしております。(西村)

” ” これからの催し物のお知らせ ” ”

♥文庫開館記念・子どもおはなし会♥

7月18日(日)10:30~11:45 (於:文庫)

★(海の日のおはなし会10周年)★

7月18日(日)16:30~19:00

(於:伊豆高原駅土曜(土)会)

もうすぐ夏休み

文庫は、8月14日~22日まで開館します。たくさん本を読みに来てね。調べ物にも挑戦してみよう!!

☆☆今後の開館スケジュール☆☆

◆8月は14日(土)~22日(日)

全日 午前10:00~午後3:00

◆9月は、18日、19日通常開館です。

◆10月は16日、17日通常。

☆17日(日)夕方:秋の夜長のおはなし会

◆11月は通常と違います。13日、14日

※文庫の時間:土曜日は午後2時~5時、日曜日は午前10時~午後3時

※毎月開館日の日曜には、「子どものための小さなおはなし会」があります。

午前10:30~11:00

♥文庫開館日は毎月、第3日曜とその前日の土曜日の2日です(従って第3土曜日でなく第2土曜日ということもあります)。

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》

みんなで勉強会(おはなし・沙羅)

★8月は21日(土)です。次のおはなし会の練習をはじめています。お楽しみに!

沙羅の樹文庫便り

No.47 (2010年7月号)



竹下文子作 いせひでこ絵 講談社 2006

この絵本の女の子はどんな夏をすごしたのだろう。表紙は、なぜか、不思議でおかしくて、淋しい。

昔、子どものころ、夏はドキドキ、ゾクゾクするものだった。照りつく太陽の下でおっきく元気に飛びまわったけれど、なんだか薄暗く不気味な影も知った。そして夏が終わるのが無性に淋しかった、悲しかった。今の子どもたちもきっと、大人には計り知れない夏の体験をして大きくなっていくのだろう。

みなさんがたくさん本を借りに来て読んでくださるので、文庫にはたくさん本が増えました。沙羅の樹文庫も満4歳になりました! ありがとうございます。

連絡先: 沙羅の樹文庫

電話 0557-51-3737

最近お借りした本についての読後感 2010.7.16(その1)

「何処に行くのか、この国は一元駐米大使、若人への遺言」

村田良平著 ミネルヴァ書房 2010)

村田良平氏は外務省で駐米大使を務めてから駐ドイツ大使に就任されるという極めて希な経験をお持ちの方である。書名に「遺言」とあるが、平成22年2月に本書を出されて3月18日に亡くなられ、まさに「遺言」となった。

内容は硬骨の外外交官が、あらゆる面で「亡国」の兆候が顕著なわが日本の前途を憂い、大東亜戦争(太平洋戦争でなく著者はあえて「大東亜戦争」と呼ぶ)・米国による日本占領・日本の安全保障・日本経済・日本の近隣外交・日本の対外政策の内政等々に関し、正しい歴史観に立って正道に戻れと呼びかける憂国の書である。著者は日本が、「極めて限られた自前の核抑止力を保有するのが最も正しい途であり——」とさえ述べている。朝日新聞や「9条を守る会」などは腰を抜かすかもしれない。

(森林浴)

『思い出袋(岩波新書 新赤版)』(鶴見俊輔著 岩波書店 2010) ~勁くしなやかな思想と言葉~

まずなによりも名文だ。論理的であるがゆえに、その内容が些かの抵抗もなく心に浸透していく。文章を読むことの心地よさをこれほど味わえることはめったにない(江上剛)

「図書」<一月一話>に7年にわたって連載されたエッセーをまとめたものです。

一回分原稿用紙3枚弱程の凝縮された文章の中から泉のように生命力がほんと、あふれてきます。読むごとに素通りできない何者かに引っ張られ、何度も読み返したり、行間を理解できたり、考え込んだり。

疲れ果てているわたしは毎晩寝る前に読み、その言葉を反芻しながら眠りに落ちていく……。

7年×12話=84話+書ききれなかったこと一むすびにかえて、で終わりです。

私、ふたたび『思い出袋』のなかに入っています。

思想家、哲学者であり、ベ平連の活動家、「9条の会」の発起人でもある著者。本来なら読みこなす事が出来るか?と思われたのに、ドンドン読んでしまっ、早く読み終わってしまうのが勿体なくて、無理して本を伏せるという読書経験を始めてしました。

人生にちょびっとでも疲れた方へ~

読みましょう! ページを開きましょう!

★ひと月づつ、気の置けない仲間と読み合わせて行けたらどんなに楽しく、様々な来し方を語りあえるのではないかと、思いました。(田畑木利子)

<わたしのおすすめ>

吉武輝子著『炎の画家・三岸節子』(文芸春秋 1999)
澤地久枝著『好太郎と節子・宿縁のふたり』(日本放送出版協会 2005)

父が家を新築したのは私が20歳を越えた頃。父が亡くなったのは24歳のときだから、その間にその絵は我が家に来てきたと思われます。気がついたときにはあったので、いつ飾られたか覚えていない。それが、三岸節子の陶板画「花」の絵です。壺にはいった赤と白の花は、名前が分からないのですが、私はその赤がとても気に入っています。その頃三岸節子を知っていたとは思えないのですが、その後間もない時期にその名前は私にとって親しみのあるものになっていたような気がします。

今回東京で開かれていた三岸節子展に行ってきた!! という人の話をお聞きして、「行きたかった!!」と思いました。私もその展覧会を知らせる新聞を切り抜いてきました。そして、縁あって2冊の本の寄贈があり読むことができました。本も出会いが大事です。一気に2冊を読みました。

先に吉武輝子((この人の著書は初めて手に取った)を読んだのですが、あとから澤地久枝(彼女は好きな作家なので何冊か読んでいます)を読み進めたら、いつもは気にしない文体の違いが気になりました。私には澤地のきっぱりと歯切れのいい物言いが、とてもよかったです。

女たらしで、苦勞させられた夫・好太郎との結婚生活は10年しかなかったのに、彼の才能を買って、節子は散逸していた彼の絵を買戻し、「三岸好太郎美術館」を作るのですから、すごいなあと思いました。私が若い頃、好太郎の名前は無名に近かったと思うのですが、節子が、絵を集めて美術館をつかったので、名前が残るようになったのだと思います。

1905(明治38)年生まれこの時代の女性として、裕福な家が没落する中で、親の反対を押し切って絵の勉強をするために上京し、19歳で妊娠、結婚を経て、子ども3人を育てながら、画家の道を貫いた人生は、現代でもなかなかできないことではないでしょうか。

2冊ともに、若い頃の節子の自画像が使われています(表紙と中味一ページ目)、これがとても素敵な絵です。そして90歳を超えて描いた「さいた さいた さくらがさいた」の桜の絵も、強烈な印象を残しています。自分の好きな絵が一枚、手元にあるといいですね。(2010.7) (伊豆景子)

新しく入った子どもの本

『むかしむかし』(谷川俊太郎詩 片山健絵 イーストプレス 2010)『かしこいモリー』(デ・ラ・メア再話 エロール・カイン絵 ほるぷ出版 2009)『夜、空をとぶ』(ランダル・シャルル作 モーリス・センダック絵 みすず書房 2000)『フェドーラばあさん おおよわり』(K.チュコフスキー作 V.リシガング絵 2010)『星とたんぼ』(金子みすず作 金の星社 2005)

『お姫さまとゴブリンの物語』(マクドナルド作 脇明子訳 岩波少年文庫)※リクエスト『グリーンノウ物語1~6』(ルーシー・M.ボストン作 仮名俊介訳 評論社 2008)※リクエスト『のっぽのサラ』(パトリシア・マクラクラン作 金原瑞人訳 徳間書店 2003)『夜の鳥』『ヨアキム』(トールモー・ハウゲン作 山口卓史訳 河出書房新社 2003)『永遠の夢』(レイ・ブラッドベリ著 晶文社 2010)

新しく入った大人の本

『マルガリータ』(村木嵐著 文藝春秋 2010)『小暮写真館』(宮部みゆき著 講談社 2010)『夜行観覧車』(湊かなえ著 双葉社 2010)『おれのおばさん』(佐川光晴著 集英社 2010)『夕暮れのみどりの光』(野呂邦暢著 岡崎武志編 みすず書房 2010)『黒船前夜』(渡辺京二著 洋泉社 2010)『残務整理』(多田富雄著 新潮社 2010)『無言館はなぜつくられたのか』(野見山暁治・窪島誠一郎著 かもがわ出版 2010)『一週間』(井上ひさし著 新潮社 2010)『花狩』(田辺聖子著 清流出版 2010)『母』(姜尚中著 集英社 2010)『くじけないで』(柴田トヨ著 飛鳥新社 2010)『松林図屏風』(萩原伸介著 日本経済新聞出版社 2008)

『永遠の故郷 薄命』『永遠の故郷 真昼』(吉田秀和著 集英社 2009)『にんげん蚤の市』(高峰秀子著 清流出版 2009)『千曲川』(小宮山量平著 理論社 1997)※リクエスト『ことばの贈りもの』(松岡享子著 東京子ども図書館 2009)『世界は一冊の本』(長田弘著 みすず書房 2010)『日本人へー国家と歴史篇ー』(塩野七生著 文春新書)『終着駅へ行ってきます』(宮脇俊三著 河出文庫 2010)『アイヌ民譚集 付. えぞおばけ列伝』(知里真志保篇訳 岩波文庫 1981)

寄贈本

『ちいさな言葉』(俵万智著 岩波書店 2010)『本の虫ではないのだけれど』(清水真砂子著 かもがわ出版 2010)『この日、この空、この私』(城山三郎著 朝日新聞社 1999)『桓武天皇の謎』(小林恵子著 祥伝社 1999)『源氏将軍神話の誕生』(清水真澄著 日本放送出版協会 2009)